

梶研究会の紹介

概要

●はじめまして♪ 以下は、来年度ゼミ募集用に、主に1年生を対象に作成したものです。外部の方がご覧になってもゼミの概要がわかる内容になっています。

途中までは、コロナ禍以前のゼミの内容や様子について説明しています。2020年度も今年度も、大きな特色である沖縄離島ゼミ合宿が出来なかったり、ゼミ後の懇親が出来なかったりと制約を余儀なくされていますが、勉強する内容は基本的に変わりません。

言い換えると、コロナ禍においても、身近な場所でのフィールドワークも含めて、ゼミのテーマに沿った個人研究が十分に出来る、とさせていただきます(*^^)v



●テーマは「**文化的景観とエコツーリズム**」です。

文化的景観とは「**自然と人間の共同作品**」といえるような、エコな暮らしぶりが表れた景観を評価する新しい考え方で、**見た目より中身**—伝統的な生業・生活文化の、自然との共生関係など—を重視します。この「文化的景観」という素材を、持続的な地域づくりに活かす手法の代表が**日本型の「エコツーリズム」**です。ゼミ生は各自が関心を持つフィールドや具体的テーマを選んで現地調査を行い、教室での個別発表を通じて成果を共有し合います。新参加者は、(コロナ禍が収束すれば)夏休みに催される**沖縄県八重山諸島ゼミ合宿**に必ず参加してもらいます。



梶ゼミ概要

- ゼミ生の基礎教養となる授業は、梶裕史「**環境表象論 I・II**」という授業です(ゼミ生必修)。文化的景観をテーマとし、日本型のエコツーリズム、「五感」、民間伝承のなかのエコロジカルな「無形文化」等の関連事項について考察します。昨年度のシラバス(講義の概要と計画)を、下記クリックにより読むことができますので、興味のある方はご覧ください♪

https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no_id=2015805&nendo=2020&gakubu_id=%E4%BA%BA%E9%96%93%E7%92%B0%E5%A2%83%E5%AD%A6%E9%83%A8&gakubueng=AH&t_mode=pc

[https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no_id=2020&gakubu_id=%E4%BA%BA%E9%96%93%E7%92%B0%E5%A2%83%E5%AD%A6%E9%83%A8&gakubueng=AH&t_mode=pc](https://syllabus.hosei.ac.jp/web/preview.php?no_id=2015806&nendo=2020&gakubu_id=%E4%BA%BA%E9%96%93%E7%92%B0%E5%A2%83%E5%AD%A6%E9%83%A8&gakubueng=AH&t_mode=pc)



- 学部のコース制で関りが深いコースは、**人間文化コース**または**ローカルサスティナビリティコース**です。



- 新規参加者(主に2年生)は、金曜4限のゼミを履修し、継続参加者(3・4年生)は金曜5限のゼミを履修します。新規参加者は5限のゼミも「聴講」参加してもらいます。
- 教員とゼミ生相互、そしてゼミ生同士の交流・親睦を深める機会として、ゼミ後(金曜夜)にほぼ毎週、安価な懇親会を開いています♪(任意参加。コロナ以降、中止)



毎夏約1週間強の沖縄離島合宿は、伝統行事の見学と手伝い、島の方々との交流会、サンゴ礁シュノーケリングなどの自然体験と、非常に濃い体験になります。自然に寄り添った伝統的な生活文化を今も守ろうとしている姿を肌身で実感でき、参加する学年の絆も一気に深めます(*^^)vが、残念ながら2年続けて中止となっています(-_-) いまの2年生、3年生はこの秋以降にチャンスを狙います♪



島で親しい方が、地元の新聞の通信員をしている関係で、毎年、合宿のことをささやかな記事にしてくれます。竹富島で最も大きな秋の祭りに、雑用役として手伝いに行き、貢献する学生もいます



『八重山日報』
⇐2019年9月

2016年11月⇒





お金はちょっとかかりますが(^;)、一生の思い出になる貴重な日々です。2年生の学年末は、みなこの合宿体験をもとに論文を書き、3年生以降は、この合宿体験を参考にして各自が自分の興味・関心に応じて現地調査の計画を立てて、個人研究を行います



～ゼミ生より～ 個人研究テーマは多彩♪



総合テーマに関わる具体的テーマは、とても幅広くて、自分の研究とつながりを見つけた意識で、ゼミ仲間の発表を聴くと、先生がよく使う表現で“有機的に視野が広がっていく手応え”があります。前年度の学年末論文をベースに、最近発表されたテーマを、ざっとあげてみると次の通りです。

- ▶ まちなみ保全をささえる「無形」要素(住民に共有されるセンス・オブ・プレイスなど)
- ▶ 地域文化の核である地域のことば(=方言)や、方言で歌われる民謡の果たす役割
- ▶ 共生の生活文化を活かした自然保護(「五感」を活かした生業・生活の技、生きる知恵、自然への信仰心、またそれらをベースにした新たな取り組みなど)
- ▶ 日本人の「旅」の文化と自然環境との関わり(海・山に関わる信仰、樹木、動物、温泉 etc.)
- ▶ その場所に関わる文学・芸術作品、伝説・昔話、映像作品等(=目に見えない無形文化)を活かしたエコな地域づくり:フィルムツーリズム、アニメツーリズム、アートによる地域づくり など
- ▶ 伝統的な食文化関連(キーワード例:スローフード、6次産品、グリーンツーリズムなど)
- ▶ 感覚環境のまちづくりと人間形成(灯りと闇、「音風景」「かおり風景」など)



● 梶先生はよく「バラバラの知識では無意味。(いろいろ学んだことが)自分のなかで一つにつながることが、この学部ならではの収穫であり、生きた“教養”だ」と言います。ゼミ生個々の研究は、先生の「好きこそものの上手なれ！」の勧めによって、それぞれの持ち味を活かして行われるので、どれも新鮮です。いいかえると、このゼミは個性派集団で、各自が総合テーマに沿って好きなことを個人研究するのですが、それでいて底には共通性がある面白さがあります。(4年生)

自主的な「一人旅」の意義

● 学部にはフィールドスタディという現地実習授業があり、梶先生も参加を勧めています。そのFSで先生方が組むしっかりしたプログラムには遠く及ばないとしても、現地でのヒアリングが必修とされる「一人旅」(共同訪問も可)を企画して実行してみる体験は大変貴重です♪ 自分で現地の活動団体に(初対面で)連絡したりするのが正直、億劫だったり(笑)、勇気が必要だったりで、下手で効率はよくないですが、すべて自分で組み立てるわけですから。個人で訪ねると、若者は現地で歓迎されるというか、非常に親切にしてもらえることも多いです☆ (4年生)



2019年9月 3年生(当時)は奄美大島自主合宿を実施☆



曾クロマグロの養殖生け簀でシュノーケリング

中学・高校と6年間奄美大島に住んでいたゼミ生のコネクションで、2年生の夏に梶が催した八重山合宿にならって、3年生14名は奄美で合宿を行いました♪ まもなく世界自然遺産に登録される見込みの貴重な自然や、自然に寄り添う島の生活文化の一端を体験することが出来ました。



ふだんは、勉強態度についてよく説教しましたが(笑)、この自主合宿については、教員の引率なしでよくぞこれだけ充実した合宿を実施した、と手前味噌ですが褒められる充実した内容でした(*^^)v

3年生以降は、基本は「一人旅」による個人研究ですが、このようなグループ研究もOKです♪



“Withコロナ”のゼミ内容

●ここまで説明を読まれた方は、ゼミ行事としての合宿や、フィールド調査型の個人またはグループ研究が、学年末ゼミ論文を書くのに非常に重要、という印象を持たれたことと思います。

・・・確かに平時はそうなのですが、最初にひとこと触れたように、このゼミと密接な関係がある「環境表象論ⅠⅡ」の内容は、遠くに泊りがけで出かけないと学べない、というものでは全くありません。

身近にも「文化的景観」にあてはまる素材や、関連する事柄は豊富にあります★
「環境表象論ⅠⅡ」から、個人研究のヒントを数多く見出すことができます。具体的には、hoppilにサンプルとしてあげた昨年度の「環境表象論」のオンデマンド教材を読んで、実感してほしいと思います。

たとえば毎年沖縄の離島でゼミ合宿をやるのも、「沖縄の離島研究のため」が最終目標ではありません。島での実体験の収穫を、身近な日常生活に何らかの形でフィードバックするのが目的である、といえます。沖縄の島で学んで欲しいのは、「**エコな(≒持続可能な)ライフスタイル&そのもとになる価値観・幸福感**」であり、学べたことを少しでも自分の日常のライフスタイルに採り入れる、というのがその「フィードバック」にあたります。

言い換えると、「**エコなライフスタイル、それにかかわる価値観・幸福感**」の素材は、たとえば都会暮らしのなかでも、あるいはほんの少し日帰りで郊外などに出かけるだけでも、スライド7にあげたような具体例がたくさんあるのです♪

“Withコロナ”のゼミ内容

●昨年度からのコロナ禍において、ゼミ生たちは、このような視点から身近なところで個人研究テーマを探して、感染予防策に留意した日帰りのミニフィールドワークも採り入れて、研究に取り組んでいます♪

以下は、(詳しい説明は略しますが)昨年度末にいまの3・4年生が提出した学年末論文のタイトルです。

【現4年生】

- ・浦和の歴史—現在とその場で感じる思い
- ・小江戸川越—時代と共に進化するまちづくり
- ・神楽坂の文化的景観と歴史—路地景観を守るために—
- ・日本における歴史的建造物の現状と課題—東京の事例から—
- ・棚田の多面的効用—食糧生産地として以外にも増す棚田の付加価値—
- ・伝統行事が地域にもたらす影響とは—群馬県昭和村の子どもたちが紡ぐ伝統—
- ・伝統行事を通じた地域コミュニティの形成—長野県諏訪地方を例として—
- ・鳥羽、志摩の海女文化
- ・幼少期から伝統文化に触れることの重要性
 - 伝統文化を残し継承していくためには：奄美大島宇検村の事例から—
- ・有機的に進化する伝統芸能—石見人の魂に刻まれた「生きられる神楽」と舞の力—
- ・身近な神の存在—存在意義と歴史—
- ・アイヌ民族が持つ文様—人間にとって模様とは—
- ・ソーシャルビジネス、社会起業家—社会課題の解決におけるお金という要素
- ・日本人を惹きつける韓国の魅力—東京のコリアンタウンを例に、五感で感じられるもの—

“Withコロナ”のゼミ内容

【現3年生 2020年度学年末論文タイトル】

- ・都市のライフスタイルにおける農や食の関わり方—横浜・湘南地区—
- ・海に囲まれる島の魅力—江の島:愛される観光地としての側面と、暮らしの場としての素顔と—
- ・江ノ島—暮らしや観光から考える景観的価値—
- ・箱根観光とアートツーリズム
- ・歴史、文化を継承し続ける景観—成田山新勝寺・門前町の景観の在り方を探る
- ・成田山門前町が目指す景観
- ・佐原の歴史的一面を活かしたまちづくり
- ・熱田神宮を生かしたまちづくり—熱田の町の復興について—
- ・お茶農業の存続の意味と存続の方法
- ・千葉県の水産業と人々の関わり —水産業が支える文化と経済—
- ・アニメツーリズムについて—鎌倉の暮らしと聖地巡礼—
- ・「ぼくのなつやすみ」から見る日本型エコツーリズムの可能性
 - ・少子高齢化社会に生きる子供たちの暮らしの変化
 - 現代の子供たちにとっての「五感」の重要性：茨城県日立市を事例に—

タイトルにみえる地名について、東京・神奈川・埼玉・千葉などの場合は、自宅から日帰り圏内の現地調査。遠い地方の場合は、**その学生の実家がある**(または祖父母が住んでいる)地域で、**帰省時に個人調査**を行なったか、あるいはその地域や団体のオンラインの催しに参加したもの、と 부탁드립니다。

また、特定の場所にとらわれないテーマ設定も、可能なことが分かります♪

このように、コロナ禍で合宿や個人研究旅行が出来なかったとしても、ゼミで有意義な個人研究が可能です(*^^)v

「人づきあい」の大切さが学べる

先生とゼミ生、ゼミ生相互の親交を深められるのはこのゼミの特長だと思います。先生によれば、各自が自分の好きなことを研究しているだけでは「コミュニティー」にほど遠く、それで工夫の一つとしてゼミ後の夜に懇親会を常設しているといいます。参加は自由ですが、**一生の人間関係が築けるような交流**ができます。先生はゼミでは茶目っ気が多く、気持が若々しく飾り気がないので、大学教授とは思えない(笑)親近感をもってつきあえます。**人づきあいを大切にした心がけのささやかな実践は、社会に出て企業で働くときも「即戦力」として通用することが多い**と、時々遊びにきてくれるOB・OGも助言してくれますね。

(4年生)



以上、簡単ですが梶研究会についての紹介を読んで下さり、ありがとうございました！